

しあわせのかたち

千葉県市原市 岸田 一彦

「崎村先輩。今週も届いていますよ」

女子アナウンサーの後輩永野が差し出した封筒の差出人を見て、わたしは微笑んだ。山田佐知子。それは月に二、三回送られてくる彼女からの投書だった。これでもう何年続いているのだろうか。わたしがラジオのパーソナリティーを始めて二十年が経とうとしているから、少なくとも十年にはなるのではないか。ただのリスナーというだけでなく、もはや古い友人のような親近感がある。なぜなら彼女の投書にある家族は、わたしが学生時代に思い描いていた理想の家族そのものだったから。それが羨ましくてよく紹介もした。彼女の手紙は、昨今多いワープロ文ではなく、手書きだった。その美しい筆跡で綴られた、季節の話題や家族との何気ないやり取りの中に、彼女の人となりや幸せそうな家族が思い浮かんで、他のリスナーからも好評だった。

局に入社してまだ三年目で受け持った朝のラジオ番組「ふるさと定期便」が、その後のわたしに大きな影響を与えていた。人気が出て長寿番組となったことで、社内でのわたしの地位を確立させた。プライベートでも、その時の担当ディレクターだった慎一と結婚し、以来、夫婦二人三脚での番組作りとなった。

しかしその夫とは二年前から別居している。彼が深夜の番組に担当が代わって、それから次第にすれ違う生活が続いた。それが表向きは別居の原因ということにしている。だが事實は夫の浮気だった。この業界は誘惑が多い。その誘惑に夫は負けたのだ。

わたしたちの間には一人娘の茉奈がいた。夫が家を出てからは、彼女と二人だけの生活になった。高校受験を間近に控えて、茉奈は多感な頃に踏み入っている。しかし彼女は、突然母子家庭のような環境に追いやられたことに、表立った不満や苛立ちといった態度を見せることはなかった。我が子ながらその健気な姿に、気丈な女だと言われるわたしでも、ふと母親の情が顔を覗かせて部屋で一人涙ぐむこともあった。

その夫が最近になって復縁を言い出してきた。局内の廊下を歩いている時、ふいに背後から声をかけてきたのだ。立ち話という格好を装って、そんな重要な内容を口にし出した夫に、わたしはムツとした。その感情は明らかにわたしの顔にも表れていたはずだ。だが夫は、わたしの不機嫌に気づかぬ振りをして、珍しく真面目な視線を向け続けた。あたかも仕事の打ち合わせだという雰囲気、廊下を往来する同僚たちにアピールして。

男は女よりも世間体を気にする生き物らしい。別居状態という宙ぶらりんな立場に、そろそろ周囲の目が気になり出したのだ。しかし彼の本心は、寂しくなったからだろう。努めて冷静を装いながら話す夫の裏側に、彼の弱さが垣間見えていた。きつと浮気相手に捨てられたのだ。その惨めな自分をおくびにも出さずに、娘の将来なんかを真剣に考えた末だと語る彼に、わたしは胸の内

で笑ってしまった。

その場は聞き流すような素振りで立ち去った。しかし夫の音が、眼差しが、わたしの胸奥にしっかり居座ることになった。今さら復縁なんて考えもしなかった。だけど娘のことを思うと、夫の言い分もあながち否定はできなかった。いや。本音は、夫の過ちを許してもいいのではないかと、女のわたしが妥協し始めているのだ。中途半端な別居を続けたまま離婚に踏ん切れないのも、わたしのどこかに、いつか夫が戻って来るといふ期待があるのかも知れない。女は男よりも寛容にできている生き物なのだろうか。

「最近届かないですね」

放送前の打ち合わせをしている時に、後輩の永野が急にそんなことを言い出した。

「どうしたの？」

「いつも投稿してくる山田さん。こここのところ見受けないように思います」

「あら。そうだったかしら」わたしは記憶を手繰り寄せた。そう言われてみれば、来ていなかったようにも思う。このふた月ほどは夫からの復縁話に気がとられて、他に目が向いていなかったのだ。

「何かあったのでしょうか」

心配げに見つめる永野の顔を眺めているうちに、わたしの中で一つの考えが浮かんだ。山田佐知子に会えるいい機会ではないか。

「ねえ。取材に行ってみない？」

「取材ですか？」

わたしの提案に反応したのは、去年から番組担当となったディレクターの加藤だった。一瞬反対されるかと警戒するわたしに、彼は相好を崩して返してくれた。

「いいですね。行きましょう。たまには外の空気を吸うのもいいですよ。それで？ 何処に行きますか？」

好意的な彼の反応に気を良くしたわたしは、バッグから手帳を取り出した。そのアドレス欄に山田佐知子の住所がメモしてあった。いつか彼女に会ってみたい。その気持ちがいよいよ実現されるのだ。

「千葉県市原市。ここがいいわ」わたしは手帳から目線を上げ、加藤に微笑んだ。

「市原市？」

彼は山田佐知子という存在をよく知らない。もちろんわたしも実際に会ったことはない。だけど彼女ほど番組を愛してくれている人はいないのではないか。わたしは彼女への想いを加藤に打ち明けた。

「へえ。そんなリスナーさんがいらっしやっただんですか。しかしその方から便りが途絶えたようになってるのは心配ですね」わたしの話を聞き終えた加藤は、腕組みして何度も頷いた。

「で。どう？」わたしは彼の顔を覗き込む。

「もちろんいいですよ。それに今なら菜の花がきれいでしょう。ひよっとしたら桜も咲き始めているかもしれません。きっといいリポートが作れるんじゃないですか」

菜の花？ 桜？ そんな付加価値がついてくるとは想像もしていなかった。一方でわたしの脳裏には、数年前に訪れた房総の景色が鮮やかに甦っていた。まだ娘の茉奈が小学生だった時だ。夫の慎一と家族三人でローカル線に乗って養老溪谷まで出かけた。のんびりと走る観光トロッコ列車。天気にも恵まれ、澄み渡る青空の下に咲き乱れる菜の花の黄色い絨毯が、絵画のように広がっていた。ガラスがはめ込まれてなく開放された車窓をそよ風が通り抜けて頬をくすぐる。目に美しく、肌によさしい春の贈り物。そして、自然とこぼれる夫と娘の笑顔。すべてが手を差し延べてわたしの心を癒してくれていた。

あの頃は家族の中に笑顔があふれていた。意識することのない愛情で満ちていた。今のような分裂した家族になるなんて想像もしていなかった。

——あの時のわたしは幸せだったのだろうか。今のわたしはその幸せを見失っているの？

——そんなわけじゃないじゃない。今だってそれなりに幸せのはずよ。仕事は順調だし。わたししたら、何を自分らしくもないことを。きつと気の迷いだわ。

わたしは過去の残像を打ち消すように、目を伏せ、首を激しく振った。

「崎村さん。どうされたのですか？」

見上げると、加藤と永野の心配そうな顔があった。

「ううん。何でもないわよ」照れ笑いで誤魔化した。

「それならいいですけど……。ではせっかいですから、企画書

を作って上申しますね。タイトルは房総春便り。これでいきましょう」

取材では、音声にカメラマンやリポーターのタレントまで同行することになって、わたしを驚かせた。もちろん、ふるさと定期便のスタッフである永野や加藤も参加する。総勢十名を超える大所帯だ。たしかに番組を作るとはそういうことになるのだが、ただ山田佐知子に会いたいと思っただけのわたしには、この展開に啞然とするばかりだった。

台本は用意せず、臨機応変で自由な構成がふるさと定期便のコンセプトだったので、今回も山田佐知子へのアポは取らなかった。彼女に会えなければ会えないの番組へ切り替える。そんな気軽なスタンスだったのだが……

わたしたちスタッフと裏方や機材を乗せた三台のワゴンが、市原市の鶴舞地区を目指した。そこに山田佐知子がいるはずだった。しかしそこに彼女はいなかった。しかも十年も前から。近所の婦人の話では、

「たしか十年ほど前に、佐知子さんは老人ホームに入られて、以来こちらにはどなたも住んでいらっしやらないですよ。時折、佐知子さんの弟さんが様子を見に来られる程度で」

想定外の状況にわたしたちは顔を見合わせるしかなかった。

「山田佐知子さんが入られている老人ホームがどちらかご存知ではありませんか？」気を取り直して、わたしはその婦人に問いかけた。

結局、「山田佐知子を訪ねて、彼女と共に市原の春を歩く」という企画は、ただ「房総の春を告げる」という内容に切り替えられた。

「空振りには仕方ないですよ」と慰めてくれるスタッフたちへ、それでも申し訳ないという気持ちと、一方で、まさかの展開に、山田佐知子への思いがいっそう募った。

彼女からの投書は施設に入ってから始まっていたのだ。彼女から毎回届く手紙には、温かい家族のことや、花々や木々に囲まれた生活への喜びがさりげなく綴られていた。そんな投書が施設にいる彼女にどうして書けたのだろうか。そんな疑問が湧き上がり、わたしの胸奥にこびりついて消えなかった。やはりわたしは山田佐知子に会いたいのだ、と改めて思った。それが妙に、今の自分に大切な何かを教えてくれる、そんな気がした。

週末、わたしは愛車でもう一度市原市を目指した。助手席には後輩の永野。彼女もわたしと同じ気持ちだったのだ。

わたしたちが向かったのは先日の鶴舞ではなく、馬立地区うまたての老人ホーム。そこに山田佐知子がいる、はずだった。しかし今度もいなかった。しかも彼女は一月に亡くなっていた。肩を落とすわたしたちに同情したのか、施設の職員が彼女の弟を紹介してくれた。聞けば山田佐知子の唯一の肉親だという。わたしは思わず確かめていた。

「山田さんには、ご主人と二人の娘さんがいらっしやっただけです」

すると職員はそんなことはないと言ったと横に首を振りながら、

「たしかにご主人はおられました。随分以前にお亡くなりになっていきますし、子供さんはご夫婦の間にはおられませんでした」

「え！」

わたしは言葉を失った。

「いったいどういうことなんですかね。まるで狐につままれたみたい」

施設から出るなり永野が消沈した声で聞いてきた。しかしむしろ聞きたいのはわたしの方だ。わたしは慥然としたまま車に乗った。

老人ホームの職員が山田佐知子の弟に連絡を取って、とりあえずその弟の元を訪問することになっていた。だがもう、弟に会ったところでどうなるものでもないという諦めがわたしの中に広がっていた。わたしは山田佐知子本人に会いたかったのだ、と。今さら彼女の真実を知らされることに興味はなかった。いやむしろ、本当のことなど知らない方がいい。そんな感情が変わっていた。

山田佐知子の弟田代幸一は北国分寺台という市街地に住んでいた。平屋一戸建ての立派な住居だった。人それぞれに事情はあるのだろうが、唯一の肉親である姉を彼は引き取れなかったのだろうか、という勝手を怒りがわたしの中に湧いた。ほとんどそれはもう、山田佐知子がわたしの中で特別な存在として肥大化している証拠でもあった。

「崎村智子さん。お会いできて光栄です。ずっとあなたのファン

でした」玄関でわたしたちを迎えるなり、田代幸一はそう言って、真つ白になった頭をさかんに撫でた。

「去年までずっとトラックの運転手をしていましたね。あなたのラジオを聴いておりました。姉の投書をよく取り上げていただいていたよ。それを姉に話すと、本当に嬉しそうに笑ってくださるので、それが楽しみで聴いていたところもあります」

居間の中央に配置されたテーブル。わたしたちの前には田代と彼の妻が並んで座った。二人とも七十代の老夫婦に見えた。それからすると、山田佐知子は七十代の後半か八十代だったのか。老人ホームにいたと聞いてから、それなりにイメージは切り替えてはいたけど、改めて彼女の肉親を目の当たりにすると、彼女の現実を突きつけられている思いだった。わたしの当初の想定にはなかった年代だった。彼女から届く便りを読みながらわたしの中では勝手に、同年ではなくても、少し上の五十代前後ではないかと想像していた。そう思わせる彼女の投書だったのだ。往々にして事実とはそんなものなのかもしれない。すっかり関心の薄れたわたしは、あまり長居をする気もなく、聞くことだけ聞いて、すぐに腰を上げるつもりでいた。しかし……

「お姉さまの佐知子さんは一月にお亡くなりになったと伺ったのですが」

「ええ。脳腫瘍でした。昨年検査でわかったのですが、既に手術が難しい状態でした。姉本人も望まなかったのです」

「そうでしたか。……あのう。立ち入ったことをお聞きするよなのですが」

「どうぞ。あなたには姉も随分助けていただいたので、私に話せることであれば、何なりと聞いてください」田代は見るからに好々爺こうこうやといった表情で何度も頷うなずいた。

「姉も随分助けていただいた」という言葉に、何があったのだろうかかと一瞬気になったが、用意していた次の疑問を投げかけた。

「お姉さまから送られてくる投書にはよく、ご主人のことや二人の娘さんたちが登場していたのですが、老人ホームで聞いた話では、そうではなかったようなのですが」

「ええ。あれはすべて姉の作り話です」

「作り話？」

あるいはと思いつながらも、実際に事実を打ち明けられると、親友だと思っていた相手に、「あなたを本当は好きじゃなかったの」と告白されたようで、衝撃は小さくなかった。

田代は申し訳なさそうに頭を下げた。

「そのことに気づいた時は、姉に指摘したのですが、姉は『頭の中にある世界を描いてどこが悪いの?』と悪びれるふうもありませんでした。その内に私も、たとえ姉が作り出した嘘でも、それで何人かの人が癒されるのであればいいんじゃないか、と思うようになりまして。勝手な言い分ですが」

「そうなのですか……」

わたしは二の句を継げなかった。ラジオ番組への投書なのだから。そこにごとまでの真実が書き込まれているのかなんて、調べようもない。それだけに受け取った側としては全面的に信賴するしかないのだ。たとえそこにどんな偽りがあつたとしても、わたしは

事実だと信じてリスナーに伝えるだけだ。いいえ。むしろ疑うべきではないのだ。

そんなわたしの戸惑いに気づかない田代は、おもむろに視線を遠くへ向けて、

「姉は、結婚はしていました。子供は無理でしたが、その寂しさを補うように義兄^{あに}は実に優しく姉に接してくれていました。どちらかといえば、姉の方に男勝りなところがあって。そんな姉を義兄はいつも温かく見守ってくれていました。それが今から十一年前のことです。姉夫婦が館山へ車で出かけたところ、事故に遭いまして。義兄は即死。姉も大腿部を骨折して、歩けない体になりました」

「それで施設に？」

「ええ。施設ではなく、一緒に暮らそうと何度も説得したんですけどね。この家だって、姉と一緒に暮らすつもりで改築したんです。バリアフリーにして。ですが姉は、『お前に苦勞をかけるから』と頷きませんでした。……何が苦勞なんだ。姉は若い頃からこんな私の面倒を一人で背負ってくれて。こんな時くらい、その万分之一でも恩返しさせてくれって、私は頭を下げて頼んだんです」

田代の声は途中から震え出し、彼の頬を大粒の涙が落ちた。彼の横で妻も泣いていた。

その光景を目の当たりにしながら、わたしは自分の思い込みを恥じた。投書の内容が作り話だったなんて、もうどうでもよかった。そんな上辺の事実ではなく、山田佐知子の人生には、わたしなんかの想像が及ばない、壮絶な物語があったのだ。

「私たち姉弟は災害孤児なんです。大雨で発生した水害で家だけでなく両親までも一度に失いました。高校生だった姉は退学して働き始めました。朝早くから工場に出かけ、夜は居酒屋でアルバイトをしました。それもこれも、私を高校に行かせるためです。『お前は心配しなくていいから、やりたいことをやりなさい』というも笑ってくれました。本当は姉が一番学校に行きたかったはずなんです。姉は優秀で、将来は教師になるのが夢だったんです。それが一晩の、たった一晩の悪夢で、すべてが消えてしまったんです」

田代は肩をすぼめ絞り出すように続けた。

「ずっと働き詰めで、二十代だというのに、姉の体はもうボロボロでした。それでも姉は身を粉にして働いて、でもやはりそれが崇つて、入退院を繰り返すようになりました」

そこまで言って、田代はふっと息を吐き出した。まるで緊張で固まった肺を弛緩させるように。

「どんなに傷だらけの人生でも、ほんの僅かですが、いいこともあるものですね」

それは皮肉で言ったのか、それとも、心底から湧き上がる感慨だったのか。

「同じ病院に入院している患者の中に、姉を見初めてくれた人がいたんです。姉はその時ももう五十を過ぎていました。もちろん結婚なんてとっくに諦めていたんです。でもその人は心から姉を愛してくれました。その熱意に根負けしたというか、姉も最初からまんざらでもなかったというか。それが義兄でした。義兄は本

当に姉に尽くしてくれました。鶴舞の家には行かれましたか？」

急に質問を振られたわたしたちは、慌てて頷き返した。

「あの家は義兄の実家でしてね。姉の体のためには、ゆつくりと寛げる場所が必要だからと、離れにあった農機具小屋を壊して、庭を広げてくれたりもしたんですよ」

田代は微笑んだ。それがわたしには、寂しくも、しかし、ようやく掴んだ姉の幸せに微笑んだようにも見えた。だがすぐにその微笑みは田代の苦しい顔で打ち消された。彼のその表情は、続いて吐き出された言葉を予感させるに十分だった。

「それも、たった十五年でした」

「十五年？」

聞き返したわたしの横では、永野が鼻をグズグズさせて泣いていた。すると田代の妻が手元にあったティッシュボックスをそつと永野の前に差し出した。軽く会釈してティッシュを顔に当てる永野。それを横目で見ていたわたしも、ティッシュに手を伸ばさうか迷った。わたしの涙腺も崩壊寸前だった。しかし後輩に無様な姿を見せられない。こんな場面でも、わたしの強がる性格が許さなかった。

「ええ。十五年です。それが姉と義兄とが暮らした時間です。ほんの束の間のことでした。姉の人生からすれば、本当にささやかな時間だったのです。……どうしてですかね。どうして神様は、あんなに優しい姉に、これでもかと不幸を与えるのでしょうか。親代わりに懸命に働いてくれた姉に、どうして神様はひとかけらの幸せも許してはくれなかったのでしょうかね。もつともつと姉に

は幸せに……」

田代は両手で顔を覆い嗚咽した。それに合わせるように妻もむせび泣いた。そして永野までも。

わたしは拳を握り締めじつと堪えた。いつそもらい泣きでもできれば楽になるのだが、生来からの性格はこんな時でも融通を利かせてくれない。

泣き続ける三人からわたしは視線を外し、居間の窓越しに庭を見つめた。大きな窓を開ければ直接庭へ出られるようになっていた。これも姉のためにと、田代が考えたことなのだろう。庭の至る所には、春の陽射しを受けたバラやストックなどの華やかな花々が咲き誇っている。その香りに誘われたのか一羽の小鳥が木の枝にとまった。

「あら。シジュウカラかしら」

ふと口に出していた。するとわたしの声につられて、他の三人もうつむいていた顔を上げて庭へ目をやった。しばらく無言で、わたしたちはその小鳥を眺めていた。そして田代が涙を拭うと、庭を見つめながら話し出した。ゆつくりと言い含めるようなその話し方には、姉想いの彼の人となりが見え出していた。

「姉は小鳥が好きでした。施設にあった姉の部屋からも庭が見えて、庭の真ん中に木蓮がありましてね。その枝へいろんな鳥たちが遊びに来るんだそうです。あのシジュウカラだとか、メジロとか。そうした鳥の羽根や頭の色とか、鳴き声とか、姉はよく私に指さしながら教えてくれました。いつだったか、『そんなに詳しいんだったら、鳥たちのことを季節の便りみたいにして投書した

「いいじゃないか。姉さんは昔から作文が得意だっただろ」と提案したことがあります。私は前から崎村さんのふるさと定期便を聞いていたものですから、その番組ならひよっとしたら取り上げてくれるんじゃないかと思ひましてね。それを姉に伝えてあったんです。そしてある日崎村さんが姉の名前を読み上げるじゃないですか。まさかとは思いますが嬉しくなってます。でもその後を読まれた内容は、姉の近況ではなく、存在しない娘たちのこととか、亡くなった義兄が今でも生きているようなものだったので、二度驚いたというわけです」

「どうしてお姉様は、在りもしない空想の家庭を投書されたのでしょうかね」

きつとわたしの声は相手に冷たく届いたと思う。こういう湿った雰囲気に巻き込まれまいとバリアを張るわたしの性格は、その反動からか、いつも冷たいと言われる。その証拠に、田代は一瞬驚いたように目を見開き、しかしすぐに頬を緩めた。

「それはずっと姉が思い描いていた理想の家族の姿だったからです」

「理想の家族の姿……」

「ええ。晩婚だった姉には叶わなかった家族です。それを投書の中で実現させていたんです。精一杯に想像の翼を広げて。ところがあなたに投書を読んでもらえると、作り話だった姉の世界が、途端に現実になり替わっていく。ラジオの向こうで聴いている人にとって、それは疑いのない現実として聴こえていたはずですから。そう思い始めた姉は、自分までもその世界に浸るようになって

て。自分で作った世界なのに、あなたを介して、姉はその世界に住むことができただんです。理想の家族を持つことができただんです。想像の中だけのことですが……。投書を読んでもらうことで、姉は生きる気力を与えられていたんです。本当にあなたに救われたんです」

田代は深々と頭を下げた。

帰り際に田代が姉の写真を差し出した。そこには満開の桜を背景に微笑み返す上品で美しい女性が立っていた。四十代頃の彼女だろうか。その華奢な体のどこに、過酷な人生を生き抜く力が宿っていたのだろうか。わたしは思わず見入っていた。

山田佐知子は幸せな家庭に包まれた人生を送っていると思っていた。だけど、違った。彼女の人生は、わたしの想像などが及ばない暗く恵まれないものだった。しかし、そんな人生を彼女は自分の視点を変えることで、実際にはない幸せな世界として作り出していた。そう思えた。

幸せとはなんだろう。現実にある、目に見える形あるものだけののだろうか。

わたしの心はその疑問に揺れた。

「なんだか悲しいですね」車の助手席でしばらく押し黙っていた永野がポツリと呟いた。

「何が？」わたしはわざとしらばっくれて、そう返した。

「崎村さんはそう思わないんですか？ 山田佐知子の人生。わたしだったら、悲しすぎて、きつと自殺していたと思います」

助手席で永野がふくれているのがわかった。だからわたしは、今感じている気持ちを伝えようと思った。まだ自分の中で整理できていない気持ちではあったが。しかし、話し始めると、不思議とそれはわたしの胸奥でストンと落ち着くのを感じた。

「そうね。でもね。わたしはこう思うの。いいえ。思いたいの。きつと彼女は、彼女なりに自分の幸せを描いていたのよ。実際にはない幸せだったかもしれない。だけど、その空想の中に自分を置くことで、彼女は現実逃避しながらでも、幸せを感じることができた。亡くなったご主人をいつも身近に感じることができた。彼女にとつてそれはもう偽りではなかったのよ。それでいいじゃない。その人の不幸を、他人が決めるものじゃないわ」

「崎村さんはやはり強い方ですね」
「そう？ でも、案外そうでもないわよ」

永野に微笑み返すわたしの中である変化が生じていた。山田佐知子の真実がもたらした化学反応のように。

ふと、わたしの脳裏を彼女の微笑む顔がよぎった。帰り際に見せられたあの写真の顔が。その横には、ご主人の姿も。やさしい眼差しと、妻の肩にそつと宛がわれた右手。そして二人の前には二人の幼い娘たち。

その映像はいつしか、菜の花畑を走るトロッコ列車に乗ったあの日の記憶へと変わった。

もう一度自分の人生を見つめ直してみようかしら。今ならでき

る気がする。大げさかもしれないけど……ううん、そうじゃない。少し視点を变えるだけで、人生は変えられるのだ。これまで見えなかったものも、明日のわたしなら見えるはずだ。きつと。

「わたしも視点を变えてみるわ」

「え？」

「こっちの話よ。……ねえ。帰ったら、飲みに行かない？ 乾杯しなくちゃ」

「乾杯？ なんのですか？」

「もちろん、山田佐知子さんの生き様によ。敬意を込めた乾杯。よくぞそこまで見事に生き抜かれました、つて」

「それって乾杯じゃなくて、献杯じゃないですか？」

「そっか」

「本当は、ただ飲みたいだけなんでしょ」

「じゃあ、やめとく？」

「行きますよ。わたしだって今日は酔いたい気分なんですから」

その後飲み屋の話題で盛り上がった。そして二人で笑いながらわたしは、もう一度家族を取り戻したいと考え始めていた。今でも覚えている。この季節に山田佐知子から送られた家族の姿。そんな理想の家族とは程遠いかもしれないけど、もう一度それを目指そうと。

皆さま。お変わりはありませんか。春になりましたね。夏も秋も冬もわたしは好きなのですが、その中でも春が一番好きです。きつと皆さまもそうではないかしら。

今日は、春になると当家の庭にひよっこり遊びに来る可愛らしい小鳥のお話をしたいと思います。

シジュウカラという鳥をご存じですか。ああ、あれかと思われ方はたくさんいらっしやるでしょうね。そうです。そのシジュウカラなのです。

この子は、(庭に遊びに来る小鳥たちはみんな、わたしにとっでは子供みたいなものなのです)頭が黒いけど、ほっぺたが白くて、背中に折り畳んだ羽根は頭から尻尾にかけて緑色だけでなく次第に青っぽく変化しています。グラデーションというのかしら。そして鳴き声は甲高くよく通るので、遠くからでもわかります。

「ツーピーツー」「ツイピーツイピー」「チュチュパーチュチュパー」他にもいろんなおしゃべりをしてくれるんですよ。

ついこの間こんなことがあったのです。うちの娘たちが庭で遊んでいると、小四の長女の肩にふいにこの子がとまったのです。それはもう「一緒に遊ぼうよ」というように。それに気づいた長女は、一瞬ビクッと背筋を伸ばして、せっかく遊びに来た子を驚かさないうようにじつと立ち尽くしていました。その顔が、緊張しながらも、とても嬉しそう。わたしは写真を撮ってあげようと、居間で寛いでいる主人に手招きしました。すると長女の横で見上げていた小一の次女が、急に怒り出したのです。「お姉ちゃんばかりズルい」と。そして両手を伸ばして、長女の肩にいるその子を掴まえようとしたものですから、やはり驚いて飛び立ってしまいました。

その後の事は皆さまのご想像の通りです。娘たちの間で喧嘩に

なっていました。

だけどそんなことも、春風が運んでくれた家族の思い出になるのでしょうか。写真が撮れなかったことは残念ですが、私の胸の奥には、ちゃんと記憶として刻まれています。

とりとめもないことを書きました。でもこんなささやかな出来事が積み重なって、いつか振り返ったときに、「ああ。わたしは幸せだったんだなあ」と気づかされるのですね。幸せって、そんなものなのかもしれません。またお便りしますね。

かしこ
了